第1回特定秘密漏えい事案等に係る再発防止策に関する有識者会議 (議事概要)

1 日 時 令和7年1月22日(水) 10:00～11:30

2 場 所 第1省議室

3 出席者

有識者(敬称略)

黒江 哲郎(座長)、只木 誠(座長代理)、池田 陽子、関谷 純平、
高橋 秀雄

防衛省側

本田防衛副大臣、防衛政策局長、防衛政策局次長、統合幕僚監部総務部長、
陸上幕僚監部指揮通信システム・情報部長、海上幕僚監部指揮通信情報部長、
航空幕僚監部運用支援・情報部長、情報本部副本部長、防衛装備庁装備政策
部長、秘密制度監察官(公文書監理官)、防衛政策局調査課長、防衛政策局
調査課情報保全企画室長

4 議事内容

- ・ 冒頭、本田防衛副大臣より開催挨拶
- ・ 黒江委員を座長に、只木委員を座長代理に選任
- ・ 防衛省側より資料にもとづき説明
- ・ 各有識者より、情報保全事案の再発防止策等について意見

5 各有識者からの主な意見

- ・ 適性評価実施の有無及び特定秘密取扱職員への指名の有無、立入制限区画への立入許可の確認に加え、電子的な開錠システムなどで厳格に管理していくことで二重三重の漏えい防止につながる。
- ・ 防衛省が扱う秘密は複雑で、何が特定秘密にあたるのかを皆が認識しているのか。機動的な体制の中で、静的なチェックポイントを設けるのは難しいだろうが、ヒヤリハット事案を報告するような仕組みはあるのか。

- 様々なことを改善しようとして、より厳格な管理を求めると、別の形でトラブルが発生してしまうおそれがある。改善策を考えるときは、誰もが納得する合理的なものであるということが大事。場合によっては厳格にするのではなく、整理することで、全体としてより良い再発防止策になることもある。現場から上がってくる改善策を取り入れることで解決できる部分もある。
- これまで秘密に指定したものの中に秘密にする必要がなかったものもあるのではないか。ヒューマンエラーというのはそういうことも指すので、本当に秘密にすべきかどうか、それを精査するのに良い機会である。
- 様々な事案があったが、防衛省の文化、風土に根ざしているところがある。そこを考えず改善策を策定しても、改善策とはならないだろう。どのような防衛省を目指して変えていくか考える必要がある。
- 各自衛隊において独自の文化があるので情報交換がうまくいかないところもあるかもしれないが、事案が起きたときは、より迅速に共有するという仕組みをつくるべき。
- 事前の対応として教育があり、事後の対応としてペナルティがあるが、単に重くするというのではなく、取扱者が不適切な扱いを行った際のペナルティを予め知らせておくべき。
- 新しい再発防止策を様々に講じて厳格化すると、現場のやるが増えて業務過多となることを懸念している。実際に各種の保全事故が起きているのも、そういった業務過多と理解不足の弊害が出ているからなのではないか。厳格化しなさいといけなところはもちろんあると思うが、現場の担当者を助けるような仕組みをつくっていただきたい。
- 大事なのは、それがなぜ秘密になっているのかということを考えること。これから新しく秘密の取扱者として指名される人に、なぜそれを厳格に守らないといけなさいか、漏えいした場合に何が起きるか、漏えいによるダメージがどれほど大きいものなのか、ということを知りやすく伝える努力も教育をしていく上で必要。

(以上)